

永遠のミルク

松田妙子

森永乳業徳島工場が閉鎖されたという新聞記事を見て、胸が突かれる思いがしました。一九五五年、この工場で製造された粉ミルクに過って砒素が混入し、多くの赤ちゃんたちが犠牲になった事件を知っているから。そして多分、私もその一人であろうと思うから。

「多分」というのは、小さい頃母に聞かされた話以外、証拠は何も残っていないからです。——「あんたはなあ、赤ちゃんの時、森永のミルクで死にかけたんや。激しい下痢と嘔吐で、衰弱するばかりでなあ。どこのお医者も原因がわからん言うし、もうあかんと思た。けど遠くの町に評判の名医がおると聞いてな、あんたを背負うて長いこと電車で揺られて行ったら、ミルクを変えてみなさいて言われてな。W堂のミルクに変えたら、やっと助かったんや。」

昔話のようにして聞いていたそんな話を、変だと思うようになったのは、私が成人して随分経ってからでした。「あんたには森永のミルクが体質に合わなかったんや」と母は言うけど、粉ミルクの成分なんて、メーカーごとにそんなに違うものか？森永で死にかけて、W堂で生き返るようなアレルギー体質があるものか？何より「森永ヒ素ミルク事件」と時期がびったり重なっているのが、怪しすぎる！

でも、母にそれを訊こうとすると、母は真青になってブルブル震え出しました。「私が毒を飲ませたとでも言うんか！」と取り乱す母に、それ以上は訊けず。それっきり、母は認知症になって壊れてしまったので、真相は永久に藪の中です。

ヒ素ミルク事件の被害者の救済機関に、電話してみたこともあります。「あなたのように、何十年も経ってから問い合わせる人は今もいますがね。当時のミルクの缶とか、証明できるものがない限り、

被害者の認定はできない、とお断りしているんですよ」と、気の毒そうなお返事が返ってきました。

母にとっては、ヒ素ミルク事件との関わりを認めることは、自らの手で我が子に「毒入りミルク」を飲ませた、と認めることだったのでしよう。だから「森永のミルクがこの子の体質に合わなかった」ことにしておきたかったのでしょうか。そんな風にして苦しんだ人が他にも大勢いたということですか。被害者と認定された人にも、されなかった人にも。



精神科の主治医に尋ねたこともあります。「私は赤ん坊の時、どんなに空腹でミルクを欲しがっても、決して満たされない経験をしているはずですよ。それが、思春期に摂食障害を発病する原因になったということは、ありませんか？」主治医は、「ヒ素ミルク事件と摂食障害との因果関係は、証明できません」と答えました。そうであっても、私は「永遠に満たされない飢え」と「ミルク」との間に、何らかの意味を見出したいのです。人類が哺乳類である限り、逃れられない宿命のようなものを。

二才くらいの私が、泣きそうな顔で哺乳びんを抱えている古い写真を見たことがあります。ちやうど弟が生れた頃で、幼い私は、母の愛を奪われたという嫉妬心から、ミルクを欲しがったのでしょうか。その類の話は、今でもよく訊きますから、これは人類に普遍的な現象なのだろうと思います。

仏教でも使われるという、最上の美味を表わすとされる、「醍醐」という言葉。転じて最も尊いものを示すようになったというこの言葉が、元々はある種の乳製品を指す名詞だったということ。ここにも、

人類が哺乳類であることの宿命を感じます。そういえば、お釈迦様が苦行の果てに死にそうになった時、その体を癒したのも、村の娘が差し出す乳粥でした。西洋でも、至上の理想郷を「乳と蜜の流れる土地」と表現したりします。「乳」「ミルク」は、私たちにとって、単なる食品以上の何かなのです。人間が永遠に憧れ、求め続けてやまないもの。

そのミルクに猛毒が混入し、多数の犠牲者を出した事件があったこと。水俣病の公式認定の一年前だったこと。そして今、母乳や牛乳から放射性物質が検出され、自殺にまで追いつめられる人のあること。私が生れてから今日までの時間が、そのまま「森永ヒ素ミルク事件」の歴史であるという自覚を持ちつつ、語り継がねばならぬことがまた増えたことの重さを感じています。

この原稿を書いている途中、入院中の母が重態だとの連絡を受けました。かつて病める赤子の私を背負い、不安な気持ちで遠い町まで通った、若き日の母。今、立場が逆転したようにして、私は母のいる病院へと向かいます。「母のいない病院」になる日が確実に来ることを予期しながら。

2011・10・9・9:30PM

二ノスより●放射線量、研究所で測定し表示・福島の果樹園経営安齋さん

「今日も朝からお客さんは3人だけでさっぱりだめだ。梨でも食つてくかい？」。安齋一寿さん(62)はそういつて笑った。福島市中心部から車で約20分のフルーツライン。観光農園が並ぶ道路沿いに「あんざい果樹園」はある。

桃に続き、9月上旬には梨が最盛期を迎えたが、原発事故の影響で、客足は減少している。そんな中、安齋さんは自園の梨のいくつかをサンプルとして選んで放射線量を測った上で、「梨(幸水)のセシウム値26ベクレル——と紙に書いて段ボールに貼り、店頭に置いた。検査結果を知らせようと思いつたきつかけは8月。市内で開かれたイベントに桃の直売ブースを出店したが、主催者

が放射線量を調べ、お客さんに安全をアピールしていた。県が検査したところ、福島の桃は何の問題もなかったが、県の安全宣言くらいでは消費者は納得しないのかと思った。県のサンプルの取り方はまだまだキメが粗く、自分の果樹園の放射線量を知り、お客さんに伝えなければと思った。

8月末、「幸水」、「二十世紀」のサンプルをとり、客観性を確保するため、研究所など2カ所でも測定してもらった。どれも国の基準値(1キロあたり500ベクレル)を大幅に下回っていた。検査結果は、段ボールに張り出した。が、「ほとんどのお客さんは福島産を応援するお年寄りで、数値は気にしてねえなあ」。安齋さんは苦笑する。

約1.5ヘクタールの果樹園で桃、梨、リンゴを40年以上育ててきた3代目だ。9月上旬にシーズンを迎える梨狩りのお客さんはこの秋、10組だけで、客数、売り上げともに、10分の1に減った。後継ぎとして一緒に働いていた次男夫婦は5歳と2歳の子どもへの放射能の影響を心配し、北海道へ移住してしまつた。

「家族がバラバラになってしまった。補償金はいらねえから、政府と東電は放射能を取り除いてもらいてえなあ」と口にした。(朝日 小川智)

この二ノスを見て、安齋さんがものすごくかつこよく見えた。かつこいいなんて言葉はいけないのかな。「家族はバラバラになり、その心の内を察すれば、見付ける言葉がありません。だけど、「セシウム26ベクレル」と段ボールに大きく書いてその前に胸を張って立つ安齋さんはやはり、かつこいい。素敵な人だ。そして、今まで真面目に、こんなにおいしそうな梨を丹精込めて作っていらしたこのような方がたの人生を一瞬にして壊してしまつた原子力発電というものの事故に対してさしたる反省も見せずに黒塗りの書類などを平気で出す東電。何が恐いのか、増税ばかり考えていて、本当に国民を救おうとしない政府。改めて強い怒りの気持ちと絶望に近いむなしさを感じたみんな楽しくHappyがいい♪ブログより

